

人生の意味についての言説はどのような言語ゲームなのか

久木田水生

科学哲学会ワークショップ

「分析哲学／現代形而上学で「人生の意味」や「死」について「語る」ことはできるのか」

2017年11月19日

東京大学

Tell me the name of the game that you play.

— The Grateful Dead, “Doin’ That Rag”

1 はじめに

本発表は本ワークショップのタイトルにある「分析哲学」と「人生の意味」に関わる。すなわち「分析哲学で人生の意味について語ることはできるのか」という問いに答えることを目指すものである。端的に語れるか語れないかでいえば、もちろん語れるに決まっているのだが、ここで問いたいのは「分析哲学の中に人生の意味という主題を取り入れたときに、実り豊かなケミストリーが生じるか」ということである。

しかし「実り豊か」というのも曖昧な語である。例えば分析哲学には、現在多くの若い哲学者が精力的に従事しており、発表や論文の数も多い。その意味では分析哲学は現在、最も実り豊かな哲学分野の一つであろう。しかしその一方で分析哲学が社会の重要な問題に向き合っていないことや、そこでの議論がテクニカルでフォーマルな言葉のゲームのようになっていることを批判する人々もいる (cf. Unger [9], Wilshire [10])。これらの批判はある程度もっともだと思う。歴史的に哲学が「良い人生」や「良い社会」にコミットする学問だったことは確かである。Frodeman and Briggie [2] は、しかし、あまりに多くの哲学者たちが現在そういった問題から遠くに離れてしまっていることに警鐘をならす*1。この意味では分析哲学（分析哲学だけの問題ではないが）は、例えば応用倫理学などに比べて、実り豊かであるとは言えないだろう。

前者の意味で分析哲学と人生の意味の組み合わせ（以後、これを「人生の意味についての分析哲学 Analytic Philosophy about Meaning in Life」、略して APML と呼ぶことにする）が実り豊かなものになるかどうか（すなわち APML が多くの研究者を引き付け、盛んに議論が行われるフィールドになるかどうか）は私には全く分からないし、さほど興味もない。APML が多くの分析哲学者を引き寄せて分野として興隆したとしても、あるいはほとんど無視されて廃れたとして、それは歴史の偶然による（現在、形而上学の方が認識論より流行っているのに必然的な理由などないだろう）。私が興味を持つのは後者の意味で、APML が実り豊かなも

*1 「分析哲学の問題を議論することは僕自身の人生を、あるいは同じ分野の他の研究者の人生を豊かにしているぞ」という反論はここでは無視する。問題にしているのは哲学の議論がその分野の研究者以外の人間にとって何らかの意味で役に立っているかということである。

のになりうるかということである。

分析哲学がテクニカルでフォーマルなロジックに終始して、「良い人生」というような重要な問題にコミットして来なかったことが批判の対象になるのであれば、APMLのような動きは当然、歓迎されてしかるべきだろう。しかしそれは手放しで肯定できるものではない。分析哲学の原点は、意味が明瞭でなく論争的になっていた言明を（しばしば形式論理学の道具立てを用いて）分析し、疑問の余地なく真偽が明らかな言明に直す、もしそのような明瞭化ができないのであれば無意味なものとして退ける、という試みだった。そして初期の分析哲学者たちが明瞭化できない言明の典型と考えたのが、例えば人生の意味についての言明だったのだ。

従って明示的に分析哲学のスタイルで人生の意味について語るというのであれば、何らかの正当化は必要であると思われる。ただし、ここでの私の「分析哲学」のとらえ方がいささか狭すぎるという批判はあるだろう。分析哲学というのは特定の研究のスタイルを指すのではなく、文学的なレトリックを使わず厳密で明晰な論証を旨とする研究態度であるという意見や、大雑把な地理的分類・人脈による分類を指しているに過ぎないという考え方もある。それならば私は APML について何も言うことはない。そのように広義でとらえた分析哲学が人生の意味について有益な仕方と語れるかどうかについては、そういう事例があれば「然り」と言えるし、そういう事例がなければ「分からない」としか言いようがない。しかしまさに私がここで述べたような意味で分析哲学的な仕方と APML を実践している哲学者がいる。それがサディアス・メッツである。

Metz [4] は伝統的な分析哲学のスタイルで人生の意味について語ることを目指した著作である。すなわちメッツはここで、人生の意味についての言及を含む言明、例えば「アインシュタインの人生には意味があった」というような言明について、できるだけ疑問の余地なく意味を明瞭化すること、それが真である場合と偽である場合を分ける明確な条件を特定することを目指した（そしてある程度それを成し遂げたと主張した）。しかしメッツのこの仕事は、目指したことを達成しているとみなすことは難しいし、また仮にそうだとしても決して「実り豊か」とは言えないものである。それどころか人生の意味についての言説の意味を歪曲し、かつ不当に他者の人生を貶める危険すらあるものだと私は危惧している。

メッツは人生の意味を、客観的に実在するものをして扱い、それについての言明が明確な真偽条件を持つということを当然の前提としている。しかし上述のように初期の分析哲学者は人生の意味をそのようなものとしては捉えていなかったし、それゆえにこそ彼らは人生の意味について論じることを拒否したのである。いわばメッツは分析哲学のスタイルだけを真似て、その精神を捨てている。そう考えれば彼の試みがうまくいかなかったのは至極当然なのである。しかしメッツの理論がうまくいっていないからと言って APML の試みが不可能であると断じるのは早計である。人生の意味についての言説に関するメッツの想定は、多くの分析哲学者がしばしば無批判に利用する標準的な意味理論の枠組みに則っている。しかしそのような標準的な枠組みばかりが言説を理解する唯一の方法ではないということもまた、分析哲学の伝統に連なる（しかし不当にマージナライズされてきた）一部の哲学者たちが明らかにしてきたことなのである。メッツが怠ったのは、人生の意味についての言説についての分析を始める前に、それがいかなる意味理論で分析するのが適切な言語ゲームなのかを問うことだった。しかし少し自分たちの言語実践を反省してみれば、人生の意味についての言説が、客観的な事実を報告するというような目的とはまったく異なった目的を持って行われる言語ゲームであることは明らかである。

本発表で私は人生の意味についての言説を三人称的用法、二人称的用法、そして一人称的用法に分類し、それぞれに違った仕方と理解されるべきであることを提案する。そして二人称的用法については、賞賛や非難のような、事実の報告とは異なる目的をもつ言語行為である可能性を示唆し、一人称的用法については浦田悠が「実存的空虚」と呼ぶ心理の表明であり、特にそれが他者に向けられているときには救いを求める歎願であるという解釈を提示する。最後に以上のような言説の分析がどの程度、実り豊かなものであるかを評価する。

2 人生の意味についてのメッツの理論

ここ数十年のあいだ、英米系の哲学者たちはある人の人生に意味がある（意味がない）と判断できる条件について議論してきた。メッツはこれらの論者たちの主張をサーベイし、分類し、評価し、そして彼自身の理論を立てた。彼は自分の理論がそれ以前の人々の主張の背後にある直観を説明することができ、意味のある人生と意味のない人生を区別する明確な基準を提供する、と主張する。

ごく簡単に述べれば、メッツの理論は「人間にとって根本的な価値を持つもの（真理、道徳的善、美）に理性を使って貢献すると人生の意味が増大する」というものである。実際にはメッツの理論はもっとややこしいのであるが、ここではメッツの理論の細部には立ち入らず、その三つの顕著な特徴を指摘するに留める*2。第一は、彼の分析的手法である。メッツは人生の意味についての人々の判断をうまく説明できるより明瞭な条件を探求する。つまり「ある人の人生は、これこれの条件が成り立つとき、より有意義になる」（ここで「これこれ」の部分には私たちにとってより理解しやすい概念が現れる）という形で簡潔に定式化することを目指すのである。第二は、基本的に自然主義指向であるという点である。つまり彼は人生の意味について論じる際に、自身は超自然的なもの（典型的には神、天国、死後の生など）に訴えることを避ける。第三は、人生の意味に関する実在論的スタンスである。すなわち人生の意味は単に見る人の目の中にもみ存在するのではなく、世界にあるのだとメッツは言う。一言で言えばメッツのアプローチは分析的であり、自然主義的であり、実在論であると特徴づけられる。この組み合わせは現代の分析哲学者に一般的に見られるものである。このようにしてメッツは人生の意味という主題を現代の分析哲学の土俵に載せた。

メッツの仕事は英米の哲学者が人生の意味について考え語ってきたことの包括的でクリティカルなサーベイを与えているという点、そしてまた人生の意味というトピックを分析哲学の標準に適合する仕方でも扱えるかもしれないというメッセージを分析哲学者たちに送ったという点で重要である。さらにメッツの仕事が成功として評価されたならば、分析哲学者たちはこれまで分析哲学で扱われてこなかった他の話題にも同じアプローチが適用できると考えるかもしれない。

しかし私たちはメッツのアプローチが果たしてこの話題を扱うのに適切なのかと問わなければならない。メッツは、人生の意味についての言明が、客観的な基準で真偽が判定できるタイプの言明であるということを当たり前のように前提している。そしてそれゆえに「ピカソの人生には大きな意味がある」一方で、「麻薬を買うために売春をする女の人生には意味がない」ということが客観的な真理であるということになるのである。

メッツが理論を構築する際に参照する「データ」は、ここ数十年の間に英米の哲学者が人生の意味について語ってきたこと、そしてその根底にある直観である。しかしここで、彼の理論は単にここ数十年の英米の哲学者のバイアスを定式化しただけのものという可能性はないのだろうか、という疑問が生じる。現に私や森岡正博、山口尚らはメッツらの直観に対して同意していない。森岡は複数の人間の人生の意味を比較したりすることが可能だとは考えていないし（Morioka, [6]）、山口は人生の意味を理論化することの有効性を疑問視する（Yamaguchi [12]）。このような、彼とは全く異なる直観に基づく反論に対してメッツは十分な答えを用意していない。Kukita [3] においては私はメッツの議論のこの弱点を指摘したが、それに対する Metz [5] での返答は説得力のあるものではなかった。この点に関しては Kukita [13] を参照されたい。本発表ではメッツの議論を批判することよりも、メッツの議論とは異なるアプローチ、人生の意味についての言説をより適切に理解す

*2 メッツの理論の詳細については例えば書評 Kukita [3] を参照せよ。より簡潔な紹介については例えば村山 [14]、森岡 [15] を参照せよ。

ることにつながるようなアプローチを探求したい。

3 人生の意味について語るとき、私たちはどのような言語ゲームに興じているのか？

3.1 分析哲学のバイアス

人生の意味についての判断は、人の人生の意味を問う、肯定する、否定するなどの言語行為を行なう言語ゲームの一部である。異なる言語ゲームは異なる目的、ルール、慣習を持つ。例えば新しい定理を証明する数学者の言語ゲーム、久々に会って近況を報告する二人の友人の間の言語ゲーム、飛行機で隣に座った他人同士の間で交わされる言語ゲームは全く異なったものである。私たちがここで立てたい問いは次のものである：人生の意味についての言説は言語ゲームの地図の中のどこに位置づけるのが適切なのか？ メッツはこれを自然科学の言語ゲームの近くに置こうと考えた。つまり客観的で明確な基準によって真偽が決定できるような言明を用いて、客観的な根拠に基づいて主張を行ったり、あるいは主張を論駁したりする、というような言語ゲームである。しかし人生の意味をめぐる言説がそのような言語ゲームの一種であるかどうかは全く自明ではない。少なくともメッツはそのように想定することに対して何の正当化も与えてはいない。私はこの点がメッツの議論の最大の弱点であると感じている。

しかしメッツのこのような態度も理由がないわけではない。分析哲学は伝統的に客観的に真偽が決定できるような種類の言明（あるいはそのような言明にパラフレーズすることができるような言明）を主な考察の対象としてきた。ある意味でメッツは、この伝統に忠実に振る舞っていると言える。しかしメッツはまた分析哲学のアプローチを乱用しているとも言える。というのも初期の分析哲学者は主として科学的な言明や数学的な言明のみを対象としていたからである。彼らは少なくとも原理的に経験的に真理値が決定できないような文は無意味なものだと考えた。そして彼らは例えば宗教的、倫理的、美的、形而上学的な言明を無意味なものとして退けたのである。

これに対してはいくつかの方面からカウンターアクションがあった。一つには、クワインのような哲学者が、有意味な文の一つ一つが対応する世界の事態に言及しており、それに応じて真偽のどちらかの値を取る、という考えを否定した (cf. Quine [7])。そうではなく各々の文の意味と真理はそれが属する理論全体に依存する。クワインによれば、これは科学理論に属する文についても、あるいは例えば神話に含まれる文についても同様である。従って、科学と神話の間には本質的な違いはなく、「アポロはゼウスの息子である」という文は「地球は太陽に三番目に近い惑星である」という文と同じくらい有意味だし、真でもある。

第二に、分析哲学者の視野が狭すぎるのが批判された。分析哲学者は、何らかの体系的な意味論と外的な条件によって真偽が確定するようなタイプの言明だけに焦点を当て、それ以外の種類の言明は存在しないかのように、あるいはそれが哲学的に重要ではないかのように退けた。オースティンの表現を借りれば、言語を扱う哲学者たちの多くが「いかなる言明、私たちの口から発せられる何事に関しても、その唯一興味深い仕事は、真であること、あるいは少なくとも偽であることだけだ」(Austin [1], 233)と考えている。しかし私たちの言語には真でも偽でもないようなタイプの言明、あるいはその真理値が固定された意味論によって決定されないようなタイプの言明が含まれている。有名な例は「遂行的発話」である。後期のウィットゲンシュタインは言語を用いる私たちの実践（言語ゲーム）の多様性を強調し、何らかの体系的で一様な仕方ですれらを扱うことが不可能であると主張した (Wittgenstein [11])。

その後、分析哲学の伝統に連なる多くの哲学者たちが、初期の分析哲学によって拒否された話題を再び取り

上げるようになった。例えばデイヴィッド・ルイスのように可能世界の道具立てに基づく形而上学的な議論が分析哲学者の間で盛んに行われた。ルイスは可能世界が実在すると主張したが、これは初期の分析哲学者にとっては単なる無意味な主張だと思われただろう。というのも可能世界はその定義から、現実の世界から因果的に独立であり、それゆえいかなる経験的な検証も受け付けられないからである。しかしルイス以降、多くの分析哲学者たちがルイスの主張を真剣に受け止め、可能世界に基づいて議論を立てている。こういった哲学者たちは「分析形而上学者」と呼ばれている。

分析形而上学のような動きにはクワインによる経験主義の否定が影響を与えていると思われる。つまり初期の分析哲学と、それに続く論理実証主義から経験主義の制約を取り去ると、可能世界のようなものについての語りが増えるのである。その一方で今日の分析哲学者がオースティンや後期ウィトゲンシュタインの批判を無視していることは奇妙である。分析哲学者たちの多くはあたかも単一の正しい意味論があるかのように言語の問題についての研究を続けている。すなわち真理条件的、モデル理論的、指示的、あるいは表象的意味論である。この態度は彼らの実在論への選好を反映しているのかもしれない。すなわち彼らが語っているのは世界に存在するものであり、それについての言語的活動とは独立であると考えられる傾向である。

もちろんこれが正しい場合もある。しかし常に正しいという訳ではない。必要なのはどのような意味論と存在論が適切なのかをケース・バイ・ケースで考えることである。

ここで私たちが関心を持つのは、誰かの人生に意味があるかどうかを問い、判断するとき、私たちはどのような言語ゲームに興じているのか、という問いである。

3.2 二人称で語られる人生の意味

実際に人生の意味にかかわるような言明を行う状況を考えてみよう。例えば自分と無関係な第三者の人生について「ピカソの人生はファン・ゴッホの人生より意味があるね」というように、突き放した態度で論評することが実際にあるだろうか？ 私にはそのような発話はかなり不自然な、あるいはシュール・リアリスティックなものと思われる。このような言明を語用論的非文と呼びたい。人生の意味についての言説がより自然に現れるのは、このような没交渉の他者についての三人称的な語りにおいてではなく、二人称、または一人称的な語りにおいてだろう。そこで以下では三人称的な用法は無視して、二人称と一人称について考える。

まず二人称についてである。人生の意味に関わる二人称的言語ゲームの重要な特徴の一つは、人生の意味に言及する実際の言明はほとんど不可避免的に賞賛や非難などの行為と結びついている、ということである。このことはメッツの「誇りと憧憬 pride and admiration」への言及にも表れている (Metz [4], p. 31)。

「人生を無駄に過ごすな」とか「そんなことをして何の意味があるの」というような二人称的な言明はどのような状況で、そして何のために使われるのだろうか。ここで注意したいのは、私たちは怒りや落胆を引き起こさずに、人に「あなたの人生は無意味だ」と告げることはまずできない、ということである。そしてまた私たちは何か強い感情が私たちにそうさせるのでなければ、わざわざ人にそんなことを告げたりはしない。それは例えば「髪に落ち葉がついているよ」とか「どんな音楽を聞くの」といった言明とは目的も効果も全く異なっている。

私は、人生の意味についての言明は、二人称的に使われたとき、相手が自分の義務を怠っていること、周囲の要求に答えていないことに対する感情的な反応の現れなのだ、という可能性を提案したい。

私たちはここで責任についての P・F・ストローソンの議論 (Strawson [8]) を思い出すべきだろう。それは自律性と責任をめぐる伝統的な論争を背景として提示されたものだ。責任についての伝統的な考えでは、人が責任を問われるのは、その人が自律的な意思決定に基づいて意図的に行動を起こしたときのみである。しか

しながら心理学と神経科学が、意思決定と行動に際して人がどれだけ自律的かということに疑いを投げかけるにつれて、人に責任を帰すということがそもそもできるのかということもまた疑われるようになった。ある人は、私たちには自律性はなく、したがって責任もないと考える一方、ある人はそれでも私たちには自律性が何らかの形で残されると（かなり不自然な形で）論じた。

ストローソンはこのような論争の基本的な前提を覆す議論を提示した。彼は人が責任があるかどうかを判断するための基礎になるような条件や理論を探すことそれ自体に疑義を突き付けたのである。そして彼は、私たちが人に責任があると考える時、何らかの外的な基準に基づいて合理的に判断した結果としてそうしているのではなく、その人の行動に対する怒りのような反応の態度の結果としてそうしているのだ、と主張した。そのような反応の態度は、私たちの人間関係の本質の自然な表れである。したがって、人に責任を帰属するための合理的な条件を探そうと試みるのは間違いであり、人間の自律性を疑わせる心理学的・神経科学的な発見によって責任に関する通常の実践を放棄する必要はない、とストローソンは論じた。

おなじような解釈が人生の意味をめぐる言説についても可能（あるいは適切）かもしれない。それは他者の振る舞いに対して反応する私たちの生得的あるいは社会的に獲得された傾向の結果として、私たちの人間関係の中に埋め込まれている。私たちは他者を賞賛あるいは非難し、その人が自身の義務を果たすよう、あるいは私たちの期待に応えるよう促すのである。

だとすれば、たとえ私たちが有意味／無意味だとみなす傾向にある生き方や振る舞いに何らかの大雑把な共通の特徴があるにしても、人生の有意味さを判断するための正確で具体的な条件を特定しようと試みることにほとんど何の意味もないだろう。それは「お前の母ちゃんべそ」という罵り言葉の真理条件を考えることに何の意味もないのと同様である。

もし「髪に落ち葉がついているよ」という言明と「お前の母ちゃんべそ」という言明が、同じ意味理論で扱うべきものではないのだとすれば、「君の人生は無意味だ」という言明がどちらのタイプの言明により近いのかは考えたほうが良い。少なくともデフォルトで前者のタイプと同一視すべきではないことは明らかである。

3.3 一人称で語られる人生の意味

前節で私たちは二人称的に語られる人生の意味についての言説（例えば「お前は無意味な時間を過ごしている」、「人生を浪費するんじゃない」といった言明）が、ストローソンのような反応の態度のようなものである可能性を示唆した。しかし人生の意味についての言説にはもう一つ重要な用法、もしかするとより本質的な用法がある。それが一人称的な用法である。

マーティン・スコセッシ監督の『ヒューゴの不思議な発明』を見た方の多くは、主人公の少年ヒューゴ・カブレが「僕がここにいる理由」について語る印象的なシーンを覚えているだろう。ヒューゴは亡くなった父親が残した壊れたオートマトンをいつか直して動かしたいと思っている。ヒューゴの友人の少女イザベルは両親がおらず、養父母と暮らしている。ヒューゴはイザベルに、どんな機械にも目的があり、「なすよう意図されたことをする (do what they are meant to do)」、だから「壊れた機械はとても悲しいんだ」と言う。そしてそれは「人間でも同じだ」というのである。これに対してイザベルは「私には自分の目的が分からない」といい、「両親がいたら自分の目的が分かったのかな」と呟く。ヒューゴはその時、イザベルをパリの街の夜景が見下ろせる塔の窓へと連れていき、イザベルにその景色を見せて、次のような言葉をかける。

僕はよくこの世界全体が一つの大きな機械だって想像したものさ。機械には余分な部品がないだろう。

機械には必要なものがちょうど必要なだけ備わっているんだ。だから世界全体が一つの大きな機械だったら、僕だって余分な部品なんかじゃないって思えた。僕は何かの理由があってここにいるに違いないんだって。それなら君だって何かの理由があってここにいるに違いないんだ。

ここでのイザベルやヒューゴのように、自分の人生について、その目的、理由、意味を自問し、答えを考えるのも、人生の意味についての語りの重要な側面である。これは森岡が「人生の意味の中核部分」と呼ぶものに通じる（森岡 [15]）。それは、自らの人生に何の意味があるのかという問いを発するとき、「その問いが発出してくる層」であると森岡は説明する。森岡はまた、この問いを発出し、またそれに答えるべく存在しているものを「独在的存在者」と呼ぶ。これはメッツの考える人生の意味の主観主義と客観主義という二分法ではとらえられない。なぜなら独在的存在者のほかにはこの問いに答えることのできるものは存在せず、主観と客観という区別そのものが成り立たないからである。

しかし私がここで考える人生の意味についての問いは、必ずしも森岡の言う「独在的存在者」（すなわち人生の意味についての問いを発し、そしてそれに答えることのできる唯一の存在）の次に留まらない。自分の目的が分からないというイザベルに対するヒューゴのリアクションのように、問いを発する人間に対して、その問いを引き受けてともに答えを探すと、いわば共在的存在者としての意味の探求の仕方がある。従ってこれは森岡の「人生の意味の中核部分」とはまた異なる層から発出する問いである。森岡が一人称単数的な問いを扱っているのに対して、ここで私は一人称複数的な問いに関心を持っている。というのもここでの私たちのアプローチは狭い意味での「分析哲学」的なもの、すなわち「言明の意味を明瞭化する試み」であることを目指しており、そして言語とは本質的に公共的なものであるからだ。ただし私はここで私密的な言語の可能性を否定しているわけではない。言語は思考を増強するツールでもあり、その意味では他者とのコミュニケーションに用いられるだけのものではない。しかし自分自身の思考を増強するような使用法は、自己と自己の間のコミュニケーションとしても捉えることができる。その意味で一人称複数の用法から一人称単数の用法を説明できる*3。

そこで「自分の人生には意味があるのだろうか」とか、「自分が生きている意味が分からない」といった一人称的な問いについて考えよう。このような問いを浦田悠にならって「実存的な問い」と呼ぶ（浦田 [16]）*4。当然前のことであるが、実存的な問いを問うとき、人は自らの人生に意味があるのかどうかを疑っている。このような心理を浦田は「実存的空虚感」と「実存的空虚観」の二つの尺度に分類する。「感」の方は虚しさや苦悩のような感情的因子に関わる一方で、「観」は例えばニヒリズム的な世界観や人間観のような認知的因子に関わっている（浦田 [16]、3章）。

注目したいのはこういった実存的空虚が「不安や鬱、疎外感、自殺未遂など、様々な心理的問題を生む可能性がある」（同、p. 122）ということである。「自分の人生に意味はあるのだろうか」という問いは、そういった苦しみの表出なのであり、特にそれが他者に向けて発せられた時には、救いを求める歎願である可能性もある。従って人生の意味への問いは、それが自身の人生について問われるとき、「虚無の素敵な戯れ」*5ではないのだ。

だとすれば「私の人生には意味があるのだろうか」という問いを発した人は、自分の人生に意味があるかど

*3 ただしこれはもちろん森岡の独在的存在者の層から発出する人生の意味についての問いには当てはまらない。ここでの説明と森岡の説明は人生の意味についての異なる種類の問いを扱っている。

*4 メッツが扱うような「ネルソン・マンデラの人生にはどのくらいの意味があるか」というような、自分と無関係な他者の人生の意味についての問いは実存的な問いではない。実存的な問いとはあくまでも人が自分の生きる意味について、あるいは自分を含む人間そのものの存在の意味について問い掛ける問いである。

*5 ‘The meaning of life’ のアナグラムの ‘the fine game of nil’。訳は村山 [14] より。

うかを判定してもらいたがっているのではない。その人は虚しさや疎外感に苦しんでおり、そしてその苦しみを知ってもらうことを願っている、あるいは救いを求めているのである。この問い掛けに対しては、おそらくこれが正しい答えだというものとは決められないだろう。その場の状況や、問いを発した人とそれを受け取った人との間柄に依存して、適切な反応は異なる。とても親密な間柄であれば、その人が自分にとってどれほどかけがえがないかを言葉にして伝えるのが良いかもしれないし、やさしく抱擁するのが良いのかもしれない。あるいは黙って話を聞くのが良いのかもしれないし、一杯のお茶を淹れるのが助けになるのかもしれない。ヒューゴのように自分がどのようにして自分の人生に意味を見出しているかを語るのも良いかもしれない。しかし何らかの理論に基づいて「君の生き方がこれこれの条件を満たしているのであれば、君の人生には意味があるよ」と答えることはおそらくほとんどの場合において全く的外れであり、私が思うには語用論的非文である。

4 So what?

ここまで、メッツのようなやり方とは異なるアプローチで、しかしなお分析哲学の枠組みの中で、人生の意味についての言説を解明することを試みた。ここで最初の問いに戻ろう。すなわち分析哲学の中に人生の意味という主題を取り込むことで、何らかの実り豊かな結果がもたらされ得るか、という問いである。しかしながらこの発表では分析哲学全般について何かを言えるほどのことはしていないので、もっと問いを限定させなければならない。つまり「私がここでこの発表をしたことに意味はあったのか」と自問しなければならないのである。

私が扱ったのは人生の意味についての様々な種類の言説の一部分に限られているが、その部分についてはそれなりに納得のいく説明ができていくように思う。その一方でしかしながらここでの説明はかなり自明なものであり、多くの人が「それはそうだろうけど、だから何？」と思うようなものではないかと危惧している。人生の意味について人々が気づいていなかったことを気づかせ、それによってより深い理解をもたらすということもなければ、人々がこれまで信じていたことを覆すというようなインパクトもないだろう。

私がここでやったことが何らかの価値を持つとすれば、それはこの発表を聞いた人にメッツのような方向で人生の意味について研究することを思い留まらせることができたときである。というのもメッツのような方向性の研究は見間違いだし、他人の人生を勝手に無意味だと判断しつつ、それが客観的な真理であるなどと主張する（しかもメッツはこの部分に関してはほとんど何の正当化も与えていない）のは、有害ですらありうと思うからである。上でも述べたように、メッツの研究は現在の分析哲学者の多くが採用している探求の枠組みに準じたものであり、それゆえそれに慣れた分析哲学者を説得することは難しいだろうとも感じている。とはいえ中には私の発表を聞いて、分析哲学の主流派が採用する探求の枠組みを、無批判にデフォルトで適用することが、おかしな結果を生むことがあるのだということを理解してくれる人もいるだろうと期待する。

しかしそのような成果はしよせん哲学の業界の中に留まるもので、私が発表の最初で言ったような実り豊かさとは異なっている。なので私は最初に私が要求したものを提供することはできていない。したがって私はまだ狭い意味での分析哲学（言明の意味を明瞭化する試み）が人生の意味という主題を有益な仕方でも論じることができるという強い確信を持っていない。

5 結論

本発表では、人生の意味をめぐる言説について考える際に、分析哲学の主流である真理条件的・指示的意味論に訴えて言明を分析するのではなく、語用論的・言語行為論的なアプローチを使って、人が人生の意味について語る時に、いかなる言語ゲームに興じているのかを考察することが提案された。無関係の他者の人生の意味についての言説は実際にはあまり使われるケースがないことから、私たちは二人称的に使われる場合と一人称的に使われる場合を考察した。そして二人称的に使われた場合、責任に関してストローソンが特徴づけたのと同じ種類の言語ゲーム、すなわち人間関係の中に埋め込まれた反応的態度のやりとりである可能性が示唆された。また一人称的に使われた場合には、実存的空虚についての苦悩の表出、あるいは救いを求める歎願であるという可能性が示唆された。そうだとすれば、人生の意味についての判断を理論化しようと試みることは適切ではない。

私たちの提案が正しいということの正当化はここでは十分に与えられていない。浦田 [16] のような研究と、もっとしっかり突き合わせることで、あるいは人生の意味についての言説の事例をもっと集めることによって、さらなるサポートを与えることは可能だろう。しかし今回はその余裕がなかった。それゆえ私たちはこれが人生の意味についての判断を理解する正しい方法だとは主張しない。しかしメッツのようなやり方で人生の意味を理論化すること、あるいは厳密な必要条件を見つけることが人生の意味についての正しいアプローチだとデフォルトで前提されるべきではないということは、強く主張したい。

ここでの議論が、分析哲学の枠組みで人生の意味を扱うことが有用でありうるという事例になっているかと言えば、あまり自信はない。

参考文献

- [1] J. L. Austin. Performative utterances. In J. O. Urmson and G. J. Warnock, editors, *Philosophical Papers*, pages 233–252. Oxford University Press, New York, third edition, 1979.
- [2] R. Frodeman and A. Briggle. *Socrates Tenured: The Institutions of 21st-Century Philosophy*. Rowman and Littlefield, 2016.
- [3] M. Kukita. Review of thaddeus metz’s *Meaning in Life*. *Journal of Philosophy of Life*, 5(3):208–214, 2015.
- [4] T. Metz. *Meaning in Life*. Oxford University Press, 2013.
- [5] T. Metz. Assessing lives, giving supernaturalism its due, and capturing naturalism: Reply to 13 critics of *Meaning in Life*. *Journal of Philosophy of Life*, 5(3):228–278, 2015.
- [6] M. Morioka. Is meaning in life comparable?: From the viewpoint of ‘the heart of meaning in life’. *Journal of Philosophy of Life*, 5(3):50–65, 2015.
- [7] W. V. O. Quine. Two dogmas of empiricism. *The Philosophical Review*, (60):20–43, 1951.
- [8] P. F. Strawson. Freedom and resentment. *Proceedings of the British Academy*, 48:1–25, 1965.
- [9] P. Unger. *Empty Ideas: A Critique of Analytic Philosophy*. Oxford University Press, 2014.
- [10] B. Wilshire. *Fashionable Nihilism: A Critique of Analytic Philosophy*. State University of New York Press, 2002.
- [11] L. Wittgenstein. *Philosophical Investigations*. Blackwell, Oxford, 1997.

- [12] S. Yamaguchi. Agreement and sympathy: On Metz's *Meaning in Life*. *Journal of Philosophy of Life*, 5(3):66–89, 2015.
- [13] 水生 久木田. 分析実存主義とは何か: 分析哲学の進歩, あるいは退廃. In 名古屋哲学会, 南山大学, Dec. 2015. <http://www.is.nagoya-u.ac.jp/dep-ss/phil/kukita/works/WhatIsAnalyticExistentialism-rev2.pdf>.
- [14] 達也. 村山. 人生の意味の分析哲学. 現代思想 12月臨時増刊号, 45-21:266–282, 2017.
- [15] 正博 森岡. 「人生の意味」の哲学. 現代思想 12月臨時増刊号, 45-21:180–185, 2017.
- [16] 悠 浦田. 人生の意味の心理学: 実存的な問いを生む心. 京都大学学術出版会, 2013.